

# 問題提起

## 丁 貴 連

宇都宮大学国際学部付属多文化公共圏センター（CMPS）が設立されて早12年が経っている。2008年から2012年まで5年間の活動を分析した「多文化公共圏センターのこれまでの歩みを考える」（『CMPS年報』第5号）によれば、設立当初のCMPSは多文化公共圏という名称の是非をめぐって意見がまとまらないなど、国際学部の中でさえも存在感が薄かったという。それが今や国際学部の顔として、教育・研究・地域貢献のすべての点においてなくてはならない存在となったのはほかでもない。

栃木県内の外国人児童生徒教育を扱うHANDSプロジェクト、フェアトレード等途上国理解の活動を考えるグローバル教育セミナー、3・11東日本大震災・原発震災の危機に直面して立ち上げられた福島乳幼児・妊産婦プロジェクト等CMPSの地道な活動のおかげである。今ではCMPSは国際学部の唯一のセンターとして、学部にとってなくてはならない存在になってきたと確信している。

と、著者の重田康博教授がいみじくも指摘しているように、地域に根差した活動を地道に行なってきた結果である。確かに、CMPSはすでに活動を行っていたHANDSプロジェクトに加え、設立早々グローバル教育セミナー（2009）をスタートさせたのを皮切りに、宇都宮大学学生国際連携シンポジウム（2010）、福島乳幼児・妊産婦プロジェクト（2011）、日光プロジェクト（2012）、田中正造とアジア（2013）、益子プロジェクト（2015）といったプロジェクト等を次々と取り上げ、学部や大学、そして地域社会の抱える課題の解決に向け

て活動を行ってきた。これらの活動がすべて評価されていたというわけではないが、中でもHANDSプロジェクトとグローバル教育セミナー、福島乳幼児・妊産婦プロジェクト（2015年より福島原発震災に関する研究フォーラムに変更）、日光プロジェクトはCMPSを代表する事業として、2020年現在もなお精力的に活動を続けている。具体的な活動内容は「3. 主要事業の活動内容と成果、課題」を参照されたいが、2年毎に実施される宇都宮大学国際学部・国際学研究科外部評価では、毎年高い評価を得ている。

ところが、高評価を受けている外部評価と違って、CMPSの活動内容に対する学内の評価は必ずしも良いとはいえない。「学長による部局長の業績評価プレゼンテーション」（2020年5月13日実施）の席で2019年度国際学部の実績報告を行なった佐々木学部長によれば、学長をはじめとする執行部はセンターの事業について一定の理解を示しつつも、「活動の広がりを感じられない」「実績が不十分だ」「活動の中身や成果が見えないので見える化を目指すべきだ」と厳しい見方をされていたという。

この話を聞かされた時にはさすがに困惑した。前述のように、CMPSは2008年設立以来、着実に実績を積み、外部評価でも高い評価を受け続けるなど、今や学部の教育と研究に欠かせない存在なのである。そんなセンターに対し、執行部は「実績が不十分だ」と改善を要求してきたのである。このギャップは何なのか。

一方、成果が見えないという話は以前からよく言われている指摘事項である。しかしなが

ら、CMPSがこの問題に真面目に向き合っていないのも確かな事実である。執行部との間に横たわるギャップを埋めるためには何が必要なのか。

実は、2019年度外部評価に係る自己評価書を作成するために、2011年度から2017年度までの外部評価報告書に目を通したことがある。その際に気になったのは、HANDSプロジェクト以外の取り組みに対する言及が全くなかったことだ。作成に関わっていた2019年度外部報告書も「多文化公共圏センター事業は、その活動内容・HANDSプロジェクトの内容共に高評価」「研究と教育を繋ぐ独創的、学際的、実践的活動としてHANDSを高く評価」「『中学教材単語帳』シリーズによる外国人生徒のサポートは特に高く評価すべきである」と、やはりHANDSしか取り上げていない。他の国立大学に先駆けて外国人生徒入試を開拓・実施するなど、確かにHANDSプロジェクトは評価者にとって取り上げやすい活動だったと言えよう。

しかし、グローバル教育セミナーをはじめ福島原発震災に関する研究フォーラム、日光プロジェクトなど他の事業もそれぞれの分野において確実に実績を上げているのは、これまでのCMPS年報の「活動報告」が雄弁に物語っている。にもかかわらず、評価者たちがこれらの活動を報告書で扱わなかったのはなぜか。2019年度外部評価を担当した柿澤未知氏（外務省大洋州局中国・モンゴル第二課課長補佐）の「プレヒアリング コメント」は、その理由を知る上で示唆に富む。以下はCMPS関連発言である。

1. HANDSプロジェクトは、研究、教育、地域貢献のすべての点で貴学部・研究科の特色や強みを存分に活かした独創的な取組であり、高く評価できる。
2. 日光市等の協働は、地域やステークホルダーとの双方向性を有する研究・教育活動として評価である。

3. 多文化公共圏セターが実施した福島原発震災関連研究フォーラムは、学際的研究として評価しうるものの、多文化共生又は多文化公共圏の形成という貴学部・研究科の教学・研究方針との関連性が明瞭でない。

4. グローバルセミナー教育は、多文化公共圏をめぐる中核的問題を扱っており、国際的課題に取り組む我が国の関係者による講演と学生主体のワークショップを組み合わせた有意義な取組（但し、内容や登壇者から判断する限り、国際的連携による研究活動というより、むしろ教育的効果に重きを置く活動と位置付けるべきものと思料）

長い引用をしたのは、最終報告書には書かれなかったグローバル教育セミナーと福島原発震災に関する研究フォーラム、そして日光プロジェクトの活動内容に対する評価が述べられているからである。

柿澤未知氏は、福島原発震災に関する研究フォーラムと日光プロジェクト、そしてグローバル教育セミナーは、「学際的研究」と「地域貢献」と「教育」においては有意義な取組だと評価する一方、それぞれの事業とその活動内容が多文化共生または多文化公共圏の形成をめざすCMPSの基本的方向性にどれだけ合致し、それを意識した活動が行われているかどうか疑問が残ると指摘している。

この疑問は、何も彼だけが抱いたものではなく、大学の執行部も同様のまなざしをCMPSに向けているのは前述のとおりである。無論、CMPSも手をこまねいているわけではないが、理解してもらえないのも事実である。何が足りないのか。その問いに答えるためには、まずCMPSの活動は誰のために何のためにあるのかということを我々自身が理解する必要があると思ひ、本特集を企画した次第である。